

眠れる美女

2007(平成19)年12月17日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督・脚本＝ヴァディム・グロウナ／原作＝川端康成『眠れる美女』（新潮文庫刊）／出演＝ヴァディム・グロウナ／マクシミリアン・シェル／アンゲラ・ヴィンクラー／ピロル・ユーネル（ツイン、ワコー配給／2005年ドイツ映画／103分）

……川端文学の傑作には、最近のケータイ小説にはないエロティックな魅力が……。なぜドイツ人監督が……。なぜベルリンで……。という疑問も大切。また、原作にはないミステリアス性と犯罪の匂いもじっくりと……。他方、そんな難しいことを言わず、無防備に裸体をさらして眠る少女たちを鑑賞するだけでも、一見の価値あり！

こんな川端文学が……

川端康成の小説では、『伊豆の踊子』と『雪国』が圧倒的に有名だが、私が高1の頃に読んだ『眠れる美女』（1961年、川端康成62歳の時に刊行）は、エロティズムにあふれる作品で、こんな川端文学もあったのかとビックリさせられたもの。まあ、三島由紀夫にしても、初期の作品である1954年の『潮騒』はリズムあふれる青春小説だった(?)から、川端康成の若い頃の作風と老年になってからの作風が大きく変わったのは、ある意味当然……？

もっとも、川端康成の原作における主人公江口は、まだ男性としての機能を喪失していない初老の男だったから、「観察者」としての彼の言葉には説得力があり面白かったが、この映画の主人公エドモンド（ヴァディム・グロウナ）の男性としての機能は……？

なぜドイツ人が……。なぜベルリンで……？

最近のドイツ映画は、『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）、『善き人のためのソナタ』（06年）、『ドレスデン、運命の日』（06年）、『ヒトラーの贋札（にせさつ）』（06

年)、『4分間のピアニスト』(06年)等のすばらしい作品を輩出しているが、これらのドイツ映画はいずれも骨格とストーリー構成がしっかりした作品。これに対して、ヴァディム・グロウナが監督・脚本・主演した『眠れる美女』は、フランス映画的な雰囲気をもった映画で、かなり異質。

この映画のテーマは、老人と性、老人と死、エロスと死などだが、そもそも老人と添い寝をする若い娘という発想がなぜドイツに……？ それについてヴァディム・グロウナ監督は、「記録によると1920年代から30年のベルリンにはこのような館が実在したとあり、同じくプラハ、パリ、ウィーンでも確認されています」と述べているからビックリ。もっとも、ヴァディム・グロウナ監督が川端康成作品から引用したのは、①眠れる美女たち、②マダム、③江口(映画ではエドモンド)だけで、そこに犯罪的要素、スリラー的要素を加えたのはヴァディム・グロウナ監督のオリジナル。しかも、主人公エドモンドは江口と違い、15年前に妻と娘を亡くしてからは孤独で死と隣り合わせの人生を歩んでいる老齢の男。したがって、川端康成の原作よりは死の影が強つきまどっており、そのため最後にはあっと驚く結末が待ち受けている。

そんなドイツ映画には珍しい、抽象画のような作品を、じっくりと味わってみたいものだ。

目の保養だけでも十分！

この映画はいろいろと考えていくと、老人と死、エロスと死という難解なテーマが含まれているが、何もそんな哲学的な議論をすることだけが能ではなく、単なるスケベ心でこの映画を楽しむのも1つの方法。こんな館に入れるのは特殊な階層の老人と決まっているが、添い寝するだけで「悪いおふざけは、しないで下さい」というヘビの生殺し的なルールに満足できるかどうかは本人の気持次第。かえって自分の男性としての情けなさを痛感させられてみじめになるから2度と来ないという男もいるかもしれない。しかし、なぜかエドモンドはこの館が気に入った様子……。

スクリーン上に無防備でさらされる若く美しい娘たちの肢体は、①乳の匂いのする女、②経験豊かな女、③見習いの女、④情熱的な女など多種多様だが、すべて一見の価値あり！ 目の保養だけでも十分楽しめること、まちがいないし！

コーギとマダムのもステリアス性がポイント……

エドモンドに対して「君にぴったりだ」と言ってこの館を紹介してくれたのは、友人のコーギ（マクシミリアン・シェル）。ストーリー展開をみていると、このコーギは単なる紹介者だけではないようで、どこかミステリアスな雰囲気がいっぱい。ある時は、「玄関口で追い返された」と相談すると、コーギは「あの館にはもう行かない方がいい」とアドバイスしたり、またある時はエドモンドがコーギの家を訪れると、なぜかメイドが入口をシャットアウトして会うことを拒否されたり……。こりゃ、一体なぜ……？

他方、この館のしっかり者のマダム（アンゲラ・ヴィンクラー）もいかにもミステリアス。一体娘にどんな薬を飲ませているのか……？ 「外で会っても絶対に声をかけてはダメ」などという館のルールは一体誰が決めたのか……？ そしてまた、ある時はエドモンドの質問を一方的にさえぎったり、またある時は入館を一方的に拒否したり、ミステリアスなマダムの言動にエドモンドは振り回されてばかり。

さらに、時々車で館の中に入ってくる2人の男たちとマダムは一体何をしているの……？ これを見ていると、犯罪の匂いもしてくるのだが……。そんなコーギとマダムのミステリアス性がこの映画のポイント。

勝負は、あなたの想像力！

この映画は「抽象画」だから、鑑賞する人の想像力によっていかようにも解釈できるもの。もちろんストーリーはしっかりあるのだが、そのストーリーを時系列に沿って追っていただけではこの映画を本当に楽しみ、味わうことにはならないはず。

あなたなら、全裸で無防備に眠っている美しい少女に対して何を語り、どんな行動を……？ また、この館にはどんなミステリーと危険性が……？ そんな想像力をかきたてながら、この映画をじっくりと鑑賞したいものだ。そうすることによってはじめて、エドモンドの行動の意味や監督がラストシーンに込めた意味を、あなたなりに解釈し理解することができるはず。つまり、この映画の観賞については、「勝負は、あなたの想像力！」ということだ。

2007(平成19)年12月19日記